

常陽新聞

長期入院の統合失調症患者

薬剤減量で症状改善

省 班
労 研
厚 研

症状が変わらず長期入院している統合失調症の患者に対し、薬を減らすだけで病状の改善がみられることが三十日、厚生労働省研究班(主任研究者・浦田重治郎現国立精神・神経センター国府台病院院長)の研究で分かった。

抗精神病薬の種類・

量ともに多く使う「多剤大量処方」は日本に特徴的で、副作用や治療効果の面から近年批判の声が上がっている。今後、さらに薬剤を積み重ねた上で、薬を適切に減らす方法についてマニュアルにまとめる予定。

研究班は、二〇〇一年から〇三年にかけて、参加する六施設に二年以上入院している患者の中から、クロルプロマジンという薬の量に換算して一日千ミリ以上の変わらない患者五十人を抽出。他の治療を何も変えず、薬の処方量の大幅な減量を試みたところ、病状が改善したか、悪化せずに減量できた人が四十一人で、八割の成功率だった。

残る十人は病状が悪化したか、主治医の判断で減量を断念した。

これに先立つ三年間の研究では、四十人中二十六人の病状が改善している。

同様に、二年以上の長期入院患者で、抗精神病薬二種類以上、一日千ミリ以下の処方量が六カ月以上変わらない患者九十四人に対し、一剤(単剤)への切り替えを試みた。その結果、五十人(53%)で単剤化に成功した。

浦田院長は「患者の

病状や減量の速度など、成否を分けるポイントも分かってきた。今後、病状だけでなく副作用の改善や、患者の主観といった面からも効果を検証したい」としている。